

臨床検査技師国家試験低正答率の解析
- 2 養成校の解答分布による検討 -

谷口智也¹⁾ 大西英文¹⁾ 伊藤昭三²⁾ 今井正²⁾
(¹⁾昭和医療技術専門学校 ²⁾東京文化短期大学)

Key words : 低正答率、一点集中型、国家試験出題基準

【目的】第53回臨床検査技師国家試験の全国平均合格率は74.7%であった。本協議会の意見書では一部不適切な問題を除き、資格試験としては適正であると報告されている。そこで、今回、本校では学生の視点に立ち、低正答率の問題について今後の教育向上を図る目的で、東京文化短期大学と連携し、両校における選択肢別回答分布を詳細に検討し、その原因を追求した。その結果、興味ある知見が得られたので報告する。

【対象及び方法】対象は昭和医療技術専門学校の平成18年度卒業生78名並び東京文化医学技術専門学校の平成18年度卒業生62名とする。又、正解は厚生労働省発表による第53回国家試験正解肢を用い、両校の正答率が共通して50%未満の問題を抽出する。その解答分布を一点集中型、二点集中型、分散型に分類し、それぞれの問題について検討する。

【結果】両校に共通する50%未満の低正答率問題は、午前では16題(臨床生理学3題、臨床検査総論3題、臨床化学4題、医用工学概論5題、臨床検査医学総論1題)、午後では17題(公衆衛生学2題、臨床微生物学3題、臨床免疫学5題、病理組織細胞学7題)であった。それらの解答分布は、一点集中型は50%、二点集中型は30%、分散型は20%であった。又、その原因となる要素は、知識不足(アルツハイマー病での脳波、アクリジウムエステル等)、誤った記憶(頸

動脈の駆出時間、カルシウムは人体内の無機質で最も多い、ナトリウムの遠位尿細管での再吸収、NADHの分子吸光係数、抗原決定基は糖蛋白...、不規則抗体スクリーニング等)、設問文・選択肢への理解の仕方(喀痰材料は十分にすり合わせ...、保健所の業務、HE染色標本の作製過程等)、写真の判読(抗核抗体検査の写真、子宮腔部から得られたパニコロウ染色等)によるものであった。

【考察】国家試験の合否は、学生の人生を大きく左右する。教育では『何を教えたか』より、『何を身につけたか』の方が重要である。今回、両校の共通する低正答率の問題に焦点を当て、回答できなかった理由を分類し明らかにした。又、出題数の最も多いAタイプ(単純5肢択一)では、設問に対して解答がより近いものを1つ選ばなければならない。Xタイプ(5肢択二)では、設問に対して、解答を2つ選ばなければならないが、この場合、出題者側の意図するものと異なり複数解答が生じやすい。低正答率は全体の16.5%を占め、医用工学概論と病理組織細胞学に多く見られた。前者は学校での教育を強化する必要があると思われ、後者は出題者側にも検討されるべき問題がある。又、要因が知識不足によるものの中で、国家試験として適正でないものも見受けられた。今後、国家試験出題基準の改訂が行われるとしたなら、特に、小項目の設定が重要な鍵となる。

連絡先 : igi-rinken@showa.ac.jp